

都土史話

直入郡直入町神の原出土の石戈について

はじめに 佐藤満洋

直入町神の原とは、旧下竹田村下田北にある部落である。この部落は、開拓部落であり、小丘の群集している所で、部落のほとんども東西の二ヶ所に小量ではあるが、泉がある。この部落全体から弥生式後期から末期へかけての土器片が発見されるが、今年の夏、一開拓者が農耕中に、石戈を発見したので、この石戈を紹介しよう。

遺物包含地としての神の原出土の石戈

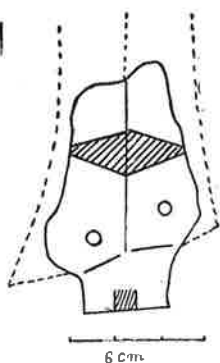
神の原部落は戦後開拓部落として生れた部落で、約百町歩に及ぶ草原であつたのが、逐次、耕深約七・八寸で開墾されている。

この開墾された畑の表面に弥生式後期から末期にかけての土器片が散在している。これらの土器片は、開拓者あるいは近くの研究者が保管しており、その数は百二・三十点に達している。

胎土は白の小砂を含んだ土を用いており、焼成雑のものから良好のもの迄、種々あり、壺形、鉢形、高杯、皿形のもの等がある。

文様は隆起帯をめぐらしたもので、櫛目文、無文のものとしてこれ又様々である。この様な土器片が発見され、注目されている時に図に見られる様な石戈が発見されたのである。しかし、作業中に偶然鏝にかゝつて出土したというだけで、出土状況は知る事は出来ないが地下七―八寸の処にあつた模様である。

石質の面に知識の無い私には、それが何石であるか判断出来ないが、青味をおびた光沢の良い石で、磨製である。



されている。(註1)

神の原出土の石戈は県内ではめずらしく、これら他所発見のものと同様、石剣石戈の分布と青銅製の剣戈の分布の関係を考え、古代の社会を考える場合の一資料として注目されよう。

むすび

石剣石戈の盛行したのは、銅剣銅戈が広く普及した後で、(註2)これら銅器をまねて、文化のおくれた地方で作られた(註3)と言われているが、私は、これと同時に、文明の利器である青銅製の剣戈を入手出来ない下層階級の人々の間で武器としてよりも、祭祀用として、青銅製品をまねて作つたのではないかと考えている。

神の原出土の石戈は、農耕を行う上において、最も心をなやました自然の脅威―台風を鎮める為に、神聖な場所―神に捧げ(註4)て地中に埋めたものではなからうか。

又、この様なことが神の原なる地名の原になつていゝのではなからうかとも考えられる。

註1 日本考古学講座―弥生文化―河出書房

註2 右同

註3 画報千年史才―集国際文化情報社

註4 毎日新聞―遺跡にも大水の跡―昭和三十年六月十六日